

ケアの倫理の倫理的規準

—Noddings のケアリング理論における「倫理的理想」をめぐる—

安井 絢子

1. はじめに

日常生活はさまざまな関係に満ちあふれまたそれらの関係によって成り立っている。このような多くの関係から構成されている日常の些細な出来事と同時に、特定の状況における個別具体的な人間独自の現実的なあり方を説明するのに最適な概念の一つが「ケア概念」である。この概念を切り口に、1980年代頃から現在に至るまでケアにかんする多様な議論がなされている。とりわけ、医療・看護・福祉・教育といった「ヒューマン・サービス」と呼ばれる分野を中心に、ケアにたいする学際的なアプローチが見受けられる¹。このようなケアについての多様な議論の一つとして、ケア概念を倫理的基盤として捉え直そうとする動きが続いている。このような動きのなかで1982年には、発達心理学者C. Gilliganが『もうひとつの声』を上梓した。そこでは「ケアの倫理 (ethic of care)」が、L. Kohlbergの発達理論の基礎をなす「正義の倫理 (ethic of justice)」²に対置される倫理理論として提案された。Gilliganの見解はフェミニズム思想家を中心に多くの領域に影響を与えたが、その見解を継承して独自の「ケアリングの

¹ ケアにかんする先駆的研究としては、M. Mayeroffによる『ケアリングについて』（1971）が有名であるとともに幅広い分野に影響を与えた。また、看護学領域におけるケアのアプローチを用いた研究としては、P. BennerとJ. Wrubelによる『現象学的人間論と看護』（1989）が挙げられる。教育学の分野では、R. E. Hultによる「教育的ケアリング」（1979）が比較的初期の研究である。しかしHultはケアリングそのものというよりもむしろケア役割を強調する立場をとるため、Noddingsに直接つながるケアの倫理の系譜とは異なるものと考えられる。

² 「正義の倫理」という表現でどの倫理理論を指しているのかは論者によっても異なる。カント倫理学のみを指すと考える論者（Kuhse, p.136）がいる一方、功利主義も含める論者（Blum, p.472）もいる。しかし本稿では、ケアの倫理の当初の主張は、Kohlbergの道徳発達モデルへの疑義に淵源をたどりうるということから、ケアの倫理の批判対象を原理・原則に基づく倫理理論であると規定し、カント主義と功利主義を「正義の倫理」と考えることとする。

倫理 (ethic of caring)」として体系化したのが教育学者N. Noddingsである。ケアリングの倫理は、道徳推論・道徳判断偏重の抽象的な議論や原理・原則の画一的な適用を行う種類のカント主義や功利主義を批判し、「人間の基本的なリアリティ」 (Noddings, 1992a, p.93) であるケアリングにもとづく倫理理論こそが本来のあるべき倫理理論であると主張した。しかし、ケアリングの倫理は抽象性や画一性を忌避するあまり、カントの道徳法則や功利主義の功利原理のような倫理的規準の命題化がなされていないために、倫理的規準の内実やその射程が不明瞭である。本稿では、ケアリングの倫理の倫理的規準の明確化を目指す。

ケアリングの倫理において、普遍的に妥当する法則のような規範が明確でない理由は二つある。第一に、ケアリングの倫理における倫理的行為への動機づけが不明瞭であること、第二に、ケアリングの倫理が近代的な原子論的自我だけでなく徳の倫理学が提示する有徳者という行為者像とも異なる「関係的自己 (relational self)」あるいは「倫理的自己 (ethical self)」という独自の行為者像を採用していること、である。倫理的行為を動機づけるものはカント倫理学ならば善意志であるのにたいして、ケアリングという倫理的行為を生起させる倫理的感情の源泉は「したい」という感情である。しかし、「したい」という感情が倫理的規範に直結するという単純な構図では倫理的行為の惹起を説明し得ない。Noddingsによれば自身がこれまで経験したケアリング関係から得た「理想 (ideal)」が倫理的行為を導くという。それゆえ、ケアリングの倫理の倫理的規準を明らかにするためには、理想概念を中心にケアリングの倫理の理論構造を正確に理解することが不可欠である。同時に、「理想」はケアリング関係の像であるから、その関係の構成要素であるケアするひととケアされるひとの描出とともに、両者に通底するケアリングの倫理の人間観としての関係的自己あるいは倫理的自己の描出もまた要請される。そこで本稿は、理想の描出とケアリングの人間観の記述というこれら二つの観点を中心に、Noddingsの主著『ケアリング』から『家庭から出発する』への理論的展開の分析によって、ケアリン

グの倫理の倫理的規準の内実とその射程について検討する。

2. 『ケアリング』におけるケアリング理論の概観

Gilliganが「正義の倫理」と呼んで自身の「ケアの倫理」と対置した従来の正統的な倫理理論は、カント主義倫理学と功利主義である。当然のことながら、この二つの立場は現在でも倫理学の主要な潮流をなす。このような流れのなかで、主にリベラリズムやリバタリアニズムを批判対象とする徳の倫理学は個人の生にたいしてもつ非手段的な価値を強調し、人が生きている歴史的・社会的・文化的な文脈を重視する。それとともに、共同体における共通善や共同体への愛着を徳の根源とみなし、善が正義に先行する概念であると主張する。ケアの倫理はこのような徳の倫理学とともに、道徳推論・道徳判断偏重の倫理学を批判する。そのうえで両理論は、倫理的行為や人間の感受性に着目した議論を展開するのである。

このように、いくつかの批判においてケアの倫理と徳の倫理学は一致点をもつけけれども、両者は軌を一にするというわけではない。両者の相違点のなかで注目すべきものとしては、近代啓蒙主義による原子論的自我の批判にかんする姿勢が異なることが挙げられる。確かに、徳の倫理学もケアの倫理と同様に原子論的自我を批判しており、文脈における「物語」的な存在という道徳主体像を提示している。しかし、これはあくまでも共同体に結びつけられた有徳な道徳行為者という人間観の描出である。これに対してケアの倫理が描く道徳行為者像は、原子論的自我でも共同体に結びつけられた共通善を具現化する行為主体でもない。それは、行為主体としての「ケアするひと」と行為の対象としての「ケアされるひと」が相互に関係し合うことで道徳行為を形成すると同時に、それぞれの自己までも発達させるという、ケアの倫理独自の道徳主体像なのである。

本章では、『ケアリング』において提起されているNoddingsのケアリングの倫

理を記述する。まず、Noddingsがなぜケアリングの倫理を提唱したのかという問題意識を確認する（2.1節）。次に、Noddingsの考えるケアリングとは何かを考察するために三つの区別、すなわち「気にかける（caring about）」と「ケアをする（caring for）」、「徳としてのケアリング」と「関係としてのケアリング」、「自然なケアリング（natural caring）」と「倫理的ケアリング（ethical caring）」との区別をそれぞれ取り上げる（2.2節）。さらに、「ケアリング関係」を、「ケアするひと」「ケアされるひと」「倫理的自己と倫理的理想」という三つの要素から分析する（2.3節）。そのうえで、残された問題点を指摘する（2.4節）。

2.1 Noddingsの問題意識

本節では、Noddingsの提起したケアリングの倫理の理論構造について考察する前に、Noddingsがどのような問題意識のもとにそれを提唱したのかについて論ずる³。

（1）普遍化可能性への批判：原理の峻拒

まず、Noddingsにおいて最も特徴的な主張の一つは普遍的な原理の峻拒である（Noddings, 1984, pp.5-6）。これはケアリングの倫理が倫理学における個別主義⁴をとるということを意味すると同時に、人間の多様なあり方を認めるがゆえに原理の画一的な適用あるいは解釈による歪曲、原理同士の葛藤を忌避することを示唆する。Noddingsが原理にもとづく倫理理論を峻拒する理由は以下の三つに集約される。

第一に、原理の画一性の問題である。原理の画一的な適用は状況の具体性を

³ 以下の論点整理にあたっては、H. Kuhse によるケアリングの倫理への批判の際の議論（Kuhse, chap.5）を参考にした。

⁴ 本稿では、「個別主義（particularism）」を Bubeck の定義に従って以下のようなものと考え、すなわち個別主義とは、個別の状況における特定の対象への感情のこもったケアを行為の倫理性の不可欠な要素とみなす立場（Bubeck:190）である。これにたいして正義の倫理は、普遍妥当的な基準を充たしていると理性によって判断できることを行為の倫理性の不可欠な要素とみなす公平主義（impartialism）の立場をとるとされている。（ibid.:191）。

無視し、型にはまった官僚的な対応を誘発する。これは人間性を重んじるケアのアプローチ⁵にとっては最も忌避すべき態度の一つであり、他者への配慮すなわちケアの欠如の最たるものである (ibid., p.85)。

第二に、原理の実践的適用においては解釈による歪曲が起こるという問題である。ある原理が確立されていたとしても、例外という抜け道を設けて、当初その原理が打ち立てられた際の意図とは正反対の適用がなされるおそれがある (ibid., pp.100-102)。

第三に、競合する原理あるいは原則同士の葛藤が生じたときの優先順位の問題である。根本原理をもたず複数の原則の両立を許容する倫理理論においては、このような問題がしばしば起こりうる。しかし、ケアリングの倫理は個別主義をとる一方で、「ケアリング関係の維持」を最優先するために、このような葛藤は起こらない (ibid., p.85)。

(2) 抽象性への批判：具体的な状況の類似性への疑義

次に、抽象性への批判が挙げられる。この批判においては、道德状況の具体的な細部が捨象されるという問題が最も重要である。このような捨象は、人間にかんして一定の共通性あるいは類似性を想定していることに起因する。これにたいしてNoddingsは、人間あるいは道德状況は同一視しうるほど酷似していることが果たしてありうるのかと批判する (Noddings, 1984, p.5)。

(3) 公平性への批判：人間の有限性の保証

最後に、公平性への批判を指摘しうる。カント主義や功利主義などの正義の

⁵ Noddings がケアリング関係のなかで人間性を重視していることは以下のような例に見出される。たとえば、仕事の面では尊敬に値しないと考えていた人と食堂で出会ったとき、その仕事を選んだ動機や仕事への情熱に傾聴することで、その人にたいする職業的な評価には何ら変わりはないけれども、その人を人間として尊重するようになるというようなことが日常的にしばしば起こりうるという (Noddings, 1984, pp.30-31)。この相手にたいする人間的な尊重がケアするひとの受容性を涵養するという。

倫理は、公平な立場からの道德判断を自明な前提とする。たとえば、H. Kuhse は公平性を「倫理の最小限の概念」の一つとして数え上げており、公平性を欠いた理論はもはや倫理学理論としては不適切であると主張する (Kuhse, chap.4)。

なるほど、公平無私の立場からの道德判断は普遍化可能性と同様に、倫理理論の不可欠な条件のように思える。もちろん、Noddings も倫理的行為を恣意的に導くことをよしとするわけではない⁶。しかし、公平性の重視は私たちの日常的な行為と齟齬のある主張と言わざるを得ない。というのも、私たち人間はすべてに平等な配慮をなしうるほどの知識や能力をもち得ない有限な存在者なのであって、その力の及ぶ範囲は限定的なものだからである。

それに加えて公平な立場からの行為の導出は、以下の二つの望ましくない帰結をもたらすおそれがある。第一に、M. Stocker が主張するような、感情を伴わない道德行為であり⁷、また第二は、「誰かがするだろう」という行為につながらない責任回避の姿勢である (Noddings, 1984, pp.25-26)。

2.2 ケアリングとは何か

本節では上述の問題意識のもとで提起されたケアリングの倫理について検討していく。まず、人はなぜケアするのか、そもそも「ケアリング」とは具体的にはいかなるものかについて、「気にかける」と「ケアをする」というケアリングの倫理独自の区別によって考察する。そして、ケアリングの区別のうちで徳の倫理学との相違を際立たせる観点から強調された「徳としてのケアリング」と「関係としてのケアリング」との区別⁸を論ずる。最後に、ケアリングの倫理

⁶ Noddings も倫理的な正誤を、倫理的判断を下す際の一つの指標と考えている。Noddings にとってもケアリングは倫理的な正誤を無視してなされるものであってはならない (Noddings, 1984, p.93)。

⁷ Stocker (1976) は、義務からのみ病気の友人のお見舞いに行く人の例を挙げたうえで、このように相手を思いやる感情をまったくもたず義務からのみ道德的行為を行う人を「道德的統合失調症」と呼んで批判した。

⁸ 1992 年に出版された『学校におけるケアの挑戦』を日本語訳するにあたって翻訳者との対談を行った際に、Noddings 自身が 1984 年時点ではこの区別をさほど自覚的ではなかったと述懐

の基本構造である「自然なケアリング」と「倫理的ケアリング」について述べる。

(1) 基本的な区別①: 「気にかける」と「ケアをする」

Noddingsにとっては、ケアリングこそが道徳的な行為である。そして彼女は、「純粹に道徳的な性格をもつ」ケアリングを、それ以外のケアリングから区別する。その区別が、他者一般を単に「気にかける」ケアと、「他者に傾注し、その他者の福利を尊重・欲求する」という特徴をもつ、特定の他者にたいして直接的に「ケアをする」対面関係におけるケアである (Noddings, 1984, p.19)。Noddingsによれば、「気にかける」ことは「ケアをする」ことの墮落した形態であり、「気にかける」ことは容易になしうるといふ。加えて、Noddingsは両者の混同を警告したうえで、次のように述べる。

わたしは「気にかける」ことを無視してきたし、また、それでもよいと信じている。それは非常にたやすく行える。わたしは、飢えたカンボジアの子どもたちを「気にかける」ことができるし、5ドルを飢餓救援基金に送れるし、いくぶんかの満足も感じうる。しかし、わたしの送金が、食料費に使われるのか、あるいは銃の購入に使われるのか、それとも政治家がキャデラックの新車を購入するのに使われるのか、わかりさえしない。これはケアリングにとって、できの悪い又従兄弟である。「気にかける」ことはつねにある一定の思いやりのある無視を含んでいる。ひとは、まさにそこまでは注意深くいられる。ちょうどそれくらいの熱中に同意する。承認する。肯定する。5ドルの寄付を行い、他の事柄を行う。(ibid., p.112)

している (ノディングス, 2007, 325 頁)。とはいえ、無意識的であるにしても、『ケアリング』のなかにもこの区別は見出せる (Noddings, 1984, pp.80-81)。

場合によっては、「気にかける」ことの方が適切である状況もあるだろう。けれどもその際に、自分が十分なケアをしていると勘違いしてはならない、と Noddings は指摘する。というのも、「ケアをする」という適切なケアリングには、直接に対面している相手への「受容 (receiving)」や、相手のニーズにたいする「専心没頭 (engrossment)」が必要だからである。とはいえ、直接的に他者をケアし得ないけれども、気にかけるような状況があることもまた事実である。これについては2.4節において再論する。

(2) 基本的な区別②: 「徳としてのケアリング」と「関係としてのケアリング」

前節で見たように、ケアリングはケアするひととケアされるひととの関係であり、このことを軽視するとケアリングの倫理の独自性が失われてしまう。しかし、ケアリングを功利性や単なる徳の一つとして捉え、そのためケアリングの倫理は徳の倫理学の一種であるとする論者も多い (Rachels, pp.165-169; Veatch, p.188; Halwani, p.44)。これは誤りである。少なくとも Noddings 自身はケアリングの倫理を徳の倫理学に属するものとは考えていない。「ケアリングそのものは徳の一つではなく」(Noddings, 1984, p.96)、徳はケアリング関係のなかでのみ徳でありうるという。つまり、ケアリングには徳が部分的にはかかわっているけれども、それはあくまでも「生きた徳」、すなわちケアするひとという理想によって記述される徳でなければならないのであって、「抽象的なカテゴリーで記述される『諸徳』」ではない (ibid., pp.80-81)。倫理的行為はケアリングの文脈のうちで評価されなければならない。徳から行為を導いてはならないし、ケアリングを抽象的な徳にのみ向けてはならないのである⁹。それゆえ、

⁹ たとえば、病死した我が子の具体的な思い出やその子の生きていたときの具体的な像について語らないが、しかし精神的な徳は高いと誰もが認める宣教師の例が挙げられる (Noddings, 1984, pp.44-46)。我が子の具体的な思い出やその生きていた生身の身体を愛するこの宣教師の妻は夫の態度に不満を感じつつも、彼の徳には敬意を払っている。このように、Noddings は

ケアリングの源泉は人間関係のうちに存するのであって、「徳の充足は私と他者の両者のうちにある」(ibid., p.97)。

このように、Noddingsが強調する「関係としてのケアリング」は、ケアするひとのみを見ているのでも、ケアされるひとのみに注目するのでもない。両者、つまり関係を見なければならないという。そしてその関係がうまくいかない場合には、それが遂行されている状況にも注目しなければならない。したがって、ケアリングの本質的な要素がケアするひととケアされるひとの関係であることこそ、その実践において大きな意味をもつことになる。Noddings自身も述懐している(ノディングス, 2007, 325-326頁¹⁰)。それゆえ、徳としてのケアリングと関係としてのケアリングの区別が重要となるのである。すなわち、ケアリングはケアするひととケアされるひとのあいだに成立する受容的・応答的な相互関係であり、その維持を要請するケアリングの倫理は具体的な他者との出会いを重視する関係的倫理なのである。

(3) 基本的な区別③: 自然なケアリングと倫理的ケアリング

以上のようなケアリング関係から「倫理」がいかに関わるのか。Noddingsは道徳性に必要な2つの感情を示唆する。ひとつが「自然なケアリング」であり、もう一つが「倫理的ケアリング」である。

自然なケアリングとは倫理的な心情の基礎となる感情であり、「したい」という理由で他者のためになす行為である。つまり、Noddingsは、ケアリングを引き起こす最初の根本的な感情は「愛や自然な心の傾向」から発する「自然なケアリング」(Noddings, 1984, p.4)だとする。自然なケアリングの例としては、母親が泣いている自分の赤ん坊を思わず知らず抱き上げてあやすという、「し

夫個人のなかでのみ完結しているケアを抽象的な徳と考え、妻の場合のように、関係のうちで成り立つケアを具体的な関係的なものとみなすのである。

¹⁰ 『学校におけるケアの挑戦』の翻訳に際して、翻訳者とNoddingsが対談したときの発言である。

たいからする」という反射的な行動として記述される (ibid., p.79)。そして、
「自然な関係から愛がおのずとわきあがるので、母親は子どもを愛する」、すなわち「自然なケアリングが倫理的なものを可能にする¹¹⁾」のである (ibid., p.43)。

次に、倫理的ケアリングである。これは「したい」という自然なケアリングの心情を想起することで生じる。つまり、ケアしケアされたという経験が記憶として蓄積され、その記憶が、他者の窮状を救いたいという欲求と、その欲求に抗して自己利益を増進させたいという欲求とに応答し、「私はしなければならぬ」という感情として、私たちを圧倒するのである。Noddingsは、このような記憶を「ケアされ、ケアしたそうした瞬間についての像」とも表現し、「それによって自分の行為を導ける」と述べる (ibid., pp.79-80)¹²⁾。

また、Noddingsは母子関係について、「どんな倫理的な心情も、それを可能にする最初の心情がなければ、あり得ない」ので「母親は子どもをケアしたいからケアする」とし、自然なケアリングという「第一の心情の想起に反応して生じる」感情が倫理的行為を支えるとする (ibid., p.79)。一般的に言っても、「きわめて恵まれない（ないしは墮落している）状態にあるひとは除き、誰しも他者の痛みや喜びを感じ」、その「記憶をとおして、自分自身がケアしたりケアされたりした経験に近づく」 (ibid., p.104)。ケア関係を結んでいない相手であっても、誰か他の人からケアされたりケアした経験を記憶として想起して当の相手をケアするのである。つまり、「自然なケアリングは倫理的行為の発生論的な必要条件」である、すなわち、倫理的な行為は自然なケアリングが先行していないかぎり成立し得ないが、自然なケアリングが同時に存立していなくて

¹¹⁾ ここでいう「可能にする」とは、「ケアリングにはつねに自然な感情がともなっている」という意味ではない。というのも、倫理的な行為がつねに愛や自然な傾向から発する自然なケアリングをともなって引き起こされるとは考えられないからである。私たちは、誰に対しても自然なケアリングという母親が子どもに抱くような感情をもって接するわけではない(品川, 2007, 177 頁)。

¹²⁾ Noddings は、このようなケアしケアされた記憶が蓄積されることによって、次に類似した状況に置かれた場合にケアを容易にする「感情の転移」があるとも指摘する (Noddings, 1984, pp.79-80)。

も成立するのである（品川, 178頁）。

ただし、自然なケアリングと倫理的なケアリングとの関係にかんして留意点がある。それは、「ケアリングにもとづく倫理はケアする態度の維持に努めるものなので、自然なケアリングに依存しはするが、それを超えるわけではない」（Noddings, 1984, p.80）ことである。つまり、Noddingsは、自然なケアリングは倫理的なケアリングより先行しており、ケアリングの根本的な感情であるとしながらも、両者の間に倫理的な価値や次元の相違を認めないのである。

2.3 ケアリングの倫理における人間像

前節のケアリングの二つ目の区別からも明らかなように、「ケアリング」とは一つの「関係」であって、ケアリングという関係概念を倫理的基盤と同時に倫理的規準とする倫理理論が「ケアリングの倫理」である。Noddingsの考える最も「適切なケアリング関係」とは人と人との一対一の対面関係であり、その関係はケアされるひとの応答を伴って双方向的に行われるとともに、特定のそのひとにたいして心のこもった「ケアをする」ことこそ、倫理的に最も望ましい行為とされる（Noddings, 1984, p.81）。

ところで、このようなケアリング関係を構成する「ケアするひと」と「ケアされるひと」とはいかなる人であり、ケアリング関係にそれぞれいかなる形で関与しているのだろうか。まず、ケアリング関係の構成要素である「ケアするひと」と「ケアされるひと」について論ずる。そのうえで、ケアするひととケアされるひとに通底する「倫理的自己」と、このようなケアリングにかかわる人々を倫理的行為に導く「倫理的理想」について検討する。

（1）ケアするひと

ケアリング関係は、「ケアするひと」と「ケアされるひと」の二者関係である。ここでは、このケアリングを構成する二つの立場のうち、まず、「ケアす

るひと」から見たケアリングを考察する。

ケアリングの際に、ケアするひとには、まず「他者の受容¹³」が要請される。通常、他者を受容するとは、他者と「共に感じる (feeling with)」ことであり、自己を他者に投影し、他者の立場に身を置くこととして捉えられる。しかしケアリングの倫理においては、共感による自身の他者への「投げ入れ」ではなく、専心の様態において、他者の苦しみ・悲しみ・叫び・願いを自己を「空にする (empty)¹⁴」ことによって自己のうちに「受け容れる」(Noddings, 1984, pp.30-35)。

ケアするひとの特徴的な意識様態は次のように変化する。ケアするひとは他者の窮状に出会うと、主観的-感情的様態において他者に専心没頭¹⁵し受容する。そこで「動機づけの転移 (motivational displacement)¹⁶」が起これば、自身の活力が他者と他者が抱える課題に向かって流れ出す。すると自身のなかに他者の窮状を受容するという様態が生まれ、受容した他者と自身の二重性において思いが分かち合われる。このような情動的-受容的様態において「感じることから見積もること、すなわち反省の様態へと移行する」 (ibid., p.32)。

¹³ ケアリングにおける「受容」は最も重要な意識様態である。これは相手を盲目的に受け容れているというよりはむしろ、自身の意志は保ちつつも、相手を受け容れているという自己のなかに二重性が生まれる状態である (Noddings, 1984, p.32)。

¹⁴ この「空にする」という表現は M. Buber からの引用である (Buber, p.66)。

¹⁵ 「専心没頭」はある人にたいする単なる「注意」ではなく、「非選択的な注意」である点が重要である。『ケアリング』ないしは初期の Noddings においては、事物への注意ではなく人間と人間のあいだの注意であるという S. Weil の「注意」概念との差異を強調するために、この用語を使用していた (Noddings, 1992b, p.16)。しかし、『家庭から出発する』においては「注意」という言葉に言い換えられている (Noddings, 2002, p.19)。この変化は概念の内実が事物への注意まで拡張されたための帰結というよりも、「専心没頭」という言葉が特定のケアされるひとへの盲目的な没入やえこひいきというイメージを先行して誘発したためと考えられる。

¹⁶ 「動機づけの転移」とは、「私の動機づけのエネルギーは他者」と、「他者の目的に流れ出す」ことである。たとえば、自身のすべきことを考えながら歩いていた次の瞬間、私の前に現れた見知らぬ人が目的地に行く方法に自身の注意を向けることであり、あるいは靴ひもを結ぼうとしている幼児を見守っているときに自然と私の指が動くような状況である (Noddings, 1992a, p.16)。ただし、この状態は自己喪失を表しているのではなく、あくまでも「私は私の自己をやめない」のである (Noddings, 1984, p.33)。また一方で Noddings は異常なケアリングの事例、すなわち「自己喪失という危険に瀕する」ような親子の不適切な共依存の関係に言及している (Noddings, 1984, P.33)。動機づけの転移がケアするひとによる押しつけという仕方、あるいは過度にケアされるひとの意志のみが尊重されるような仕方ではなされないことが、ケアリングが円滑に行われる際に重要になるのである。

このときケアするひとは他者について思考を巡らしているのでも、他者に対して自己が感じた正誤について自問しているのでもない。受容は知的な認識ではなく、感情や感受性に支えられている。とはいえ、ここでの留意点は、ケアリングは感情のみによって成立するという誤った考えに陥ってはならないということである。確かに、感情はケアリングにおいて本質的な要素ではある。けれども、それだけでケアリングが成立するのではない。そうだとすれば、単なる感傷的な議論となってしまう。では、ケアリングの倫理において思考と感情はいかなる関係にあるのだろうか。

ケアするひとは他者を受容する際には他者に「専心没頭」する。この「専心没頭」はケアリングに特徴的な意識様態である。ケアリングの倫理においては、情感的専心から客観的思考への移行が「意識の退化¹⁷」であるとNoddingsは言う。しかし、客観的思考への移行が一時的なものであるならば、必ずしも「意識の退化」ではないとも言う¹⁸ (ibid., pp.34-35)。Noddingsによれば、ケアリングにおいて客観的思考は、「自己と他者との関係」のなかでなされなければならない。この関係において意識は具体的他者をケアするために転換点を見極め、客観的思考から情感的専心へと立ち戻る。このような二つの意識様態を循環することによって、ケアリングという受容的・情感的な応答が可能になり、この意識様態における他者への「専心没頭」が適切な受容を可能にするのである (ibid., p.36)。

(2) ケアされるひと

¹⁷ これはサルトルの概念を援用したものである。サルトルが、合理性から感情への意識様態の移行を「意識の退化」と呼ぶのに対比して用いられている。ただし、サルトルが「意識の退化」を否定的に扱うのにたいして、Noddings はケアリングを行うために必要な意識様態の変化として肯定的に扱っている (Noddings, 1984, pp.34-35)。

¹⁸ これは開かない窓にたいする反応の例から理解できる。開かないように設計された窓に直面して人は最初は合理的・操作的に解決を試みるが、ある時点で情動的な様態に移行すると、窓を打ち叩き窓枠をつかんで怒鳴り出すことがある (Noddings, 1984, pp.33-34)。このような意識様態の変化を Noddings は指している。

次に「ケアされるひと」を、ケアリングの態度と相互性という側面に焦点を当てて考察する。ケアされるひととはどのような人か。

ケアするひとの実際の行為がいかなるものになるかは、ケアするひとがケアされるひとにたいして伝える態度に依拠している。この態度は合理的に思考された結果つくられるものではない。ケアリングには非合理的なかわりであるという本質、すなわち他者に夢中になるという本質がある。子どもの成長のためには「誰かがその子どもに夢中でなければならない¹⁹⁾」とNoddingsは指摘する。このように、ケアするひとの態度はケアされるひとによってケアリングとして看取される。「その態度は他者を受け容れ、抱きしめ、高みへと導く。問いかけ、応答し、共感し、呼び起こし、そして大いなる喜びを与える」(Noddings, 1984, p.67)。このようなケアするひとの態度がケアされるひとを包み込むとき、ケアされるひとはケアリングを認識し、その認識によって、ケアするひとに応答し、やがてケアするひととして新たなケアされるひとにかかわりうるようになる。このケアリング関係の連鎖²⁰⁾によってケアのネットワークをはりめぐらせて、社会を包み込むことをNoddingsは目指す。ケアされるひとにおけるケアリングの認識あるいは承認は、ケアリング関係を成立させる重要な要素なのである。

さらに、「ケアリングには必然的に相互性がある」とNoddingsは言う(Noddings, 1984, p.71)。ケアされるひとは、ケアするひとがケアされるひとを受容するのと同様に、ケアするひとを受け容れる必要はない。しかし、ケアするひとがケアリングにおいて専心没頭を要求されるように、ケアされるひともケアリング関係の相互性において要求されるものがある。では、「ケアリングの相互性」

¹⁹⁾ この「夢中にならなければならない」という表現は閉鎖的な関係におけるものではない。ケアリングは「専心没頭」と同時に、ケアされるひとの受容と動機づけの転移という双方向的な関係のなかで成立する。

²⁰⁾ 「連鎖」とは、ケアされていない人がいないようにするために、社会を包み込むケア・サークルを形成するための人間同士の不可欠なつながりである。それは親密な関係を中心に、同心円状に広がるという(Noddings, 1984, pp.46-48)。また、連鎖は、母である私と将来の娘婿との関係のような「個人的な連鎖」と、教師である私と私の未来の生徒との関係のような職業上あるいは社会的な関係に基づく「形式的な連鎖」の二種類がある(Noddings, 1992b, pp.121-122)。

とはいかなるものか。

ケアするひとはケアされるひとを適切に受容することによって、ケアされるひとの意志に盲目的に従うのではないという意味での主体としての自由を認識する。ケアされるひともケアリング関係に満たされるとき、ケアするひとが自身の自由を認識していることを看取り、その看取においてケアされるひとは成長する。このように、適切にケアされたならば、自分自身で応答や創造をなし、恐れや不安に取り巻かれずに自己の関心を追求しうる。こうして、ケアリング関係においてケアされるひとは「より十分に自分自身であること」ができるのであり、Noddingsは、「この自分自身であること、そして無自覚的に自己開示をなすことこそが、ケアされるひとのなすケアリング関係への主たる貢献である」とする (ibid., p.73)。これはすなわち、ケアされるひとがケアするひとの要請や期待によって規定されることなく、自身のうちにある可能性をそのまま開示していくことである、と考えられる。

したがってケアリング関係においては、一見ケアされるひとがケアするひとの経験のなかでケアするひとに傾注していないようであっても、ケアリング関係は維持される。先述のように、ケアリング関係はケアするひとの慈しみのもとで顕わになり、ケアされるひとの自由、創造性、自発的自己開示によって完成される。この関係の成立のために、ケアされるひとはその関係の中にいつづけなければならない。しかし、ケアされるひとはケアするひとによる受容や承認を、ケアするひとと対等な仕方で示す必要はない²¹。ケアするひとへの直接的応答、ケアされるひと自身の喜び、そしてケアするひとの眼前での幸福な成長においてケアされるひとが関係に寄与することこそが、ケアリングにおけるケアするひととケアされるひととの相互性なのである (ibid., p.136)。

²¹ ケアするひととケアされるひとには根本的に拭い去れない非対称性がある (Noddings, 1984, pp.48-49)。このことはNoddings自身も認識しており、それゆえケアリングの倫理では常にパターンリズムの危険性がつきまとうのである。

（３）倫理的自己と倫理的理想

ケアリング関係における行為主体を導くのが「倫理的自己」である。倫理的な自己は、自他関係についての基本的な認識から生ずる「現実の自己と、ケアしケアされるひととしての理想的な自己のヴィジョンとの間のアクティヴな関係」である（Noddings, 1984, p.49）。品川によると、倫理的な自己とは「ケアするものとしての私」のことである（品川, 180-181頁）²²。この倫理的自己の理想像がケアリングという倫理的行為を導くという重要な役割を果たす。すなわち、ケアリングの倫理において、倫理的理想は倫理的行為の源泉であり、倫理的なケアリングというケアリングの倫理において最も倫理的な行為は規則や原理ではなく、倫理的な理想の発達に依拠している（Noddings, 1984, p.105）。理想はケアリングの記憶から構成されており、また実際にケアしケアされることで発達する（ibid., p.94）。このように、私たちが何らかの倫理的決定をするとき、想起され参照されるのが、ケアリングの倫理的な理想なのである。

では、倫理的理想とは具体的にはどのようなものだろうか。それは、適切なケアリング関係とケアリングの状況下でのあり方を反省するときに、私が形成するケアするひととしての自分自身と、ケアされるひととしての自分自身についての像である。ここでは、ケアされるひととしての自分自身のあり方をも反省している点が重要である。これによってケアされるひとの要求を理解し、結果として、倫理的理想が完全なものとなる。倫理的な理想とは、ケアするひととしての「最良の自己」という理想像、すなわち自分自身がケアしケアされるという「最良の像」である（ibid., pp.49-51）。この倫理的理想は「人々が互いに感じあう自然な共感」と、「ほとんどのケアリングや思いやりの機会を維持・回復・強化しようとする切望」という二つの心情を源泉として生じてくる。後者の心情は、かかわりあいへの切なる望みのことである（ibid., p.104）。それゆ

²² ここでは倫理的理想の解釈については品川の分析に全面的に依拠して議論を進めることとする（品川, 第八章）。

え、倫理的理想とは、ケアしケアされる関係性において要請される本来的な自己としての倫理的な自己の像である。

最後に、倫理的理想の具体性にかかわる二つの性質、すなわち「制限」と「到達可能性」について概括して記す。

倫理的理想は私たちを抽象的思考に誘う超越的なものであってはならない。ケアリングの倫理においては、ケアするひとの過去の経験から切り離された抽象的な倫理的理想をつくり上げることは自己欺瞞である。倫理的理想は自己欺瞞を避け、今現に存在する事物と接触をとりつづけるために、道徳的行為者による過去の全行為の重みに制約されていなければならない。ケアするひとは他者とかがかわるとき、自己の内面を熟考して過去の行為や今現にある自分をすべて「自分のもの」として受け容れたうえで、そこから理想を構築する。こうして、倫理的理想が抽象への移行を引き止めるのである。このような倫理的理想の構築とその受容は、私たちを具体へと近づける。Noddingsは次のように述べる。

私たちは「昨日と今日」に属している。昨日からは自分の理想にもたらされる制限を受け容れる。明日に向かって私たちは到達されるかもしれないことを形づくる。到達可能という条件は、制限という条件と同様に重要である。…（中略）…具体的かつ道徳的行為者としての私は、実際に私の理想に到達する必要はないし、到達する過程で何度も失敗するだろう。しかし理想それ自体は、実際の世界において到達可能でなければならない（ibid., p.109）。

つまり道徳行為の主体としての私は、いつも実際に自分の理想に到達するわけではないけれども、理想それ自体は現実世界のなかで到達可能なものでなければならない。すなわち、結果的に到達できないことがあったとしても、はじめから到達不可能であってはならない。したがって、倫理的理想は自己の全体や

自己のイメージから離れたところには存在しない。それは「私はしなければならない」として私たちを捉え導く、制限されており到達可能なものである。つまり、私たちがすでに行なったことによって、また私たちができることによって制限されているのであって、私たちが理想化された抽象へと逃避してしまうように、不可能なことを理想化するのではない。加えて、ケアするひとという倫理的理想によって記述される徳は関係のうちで組み立てられ、他者に達し、他者に応答して成長する (ibid., pp.104-142)。したがって、倫理的理想には自己のもつ過去の記憶と今ある倫理的自己によって構築されることで制限されると同時に、「実際の人間との実際の関係」において到達可能でなければならない、という二つの重要な性質²³がある。

2.4 『ケアリング』におけるケアリング理論の問題点

このようにNoddingsのケアリングの倫理は、それぞれの人によって個々さまざまな行為者に焦点を当てる日常生活に即した等身大の倫理であるとともに、倫理的自己を基軸としてケアするひととケアされるひととの関係についての理想を倫理的行為の拠り所とする倫理である。また、普遍的原理の画一的適用あるいは解釈による原理の歪曲という原理・原則にもとづく倫理理論の危険性を指摘し、原理／判断パラダイムから理想／行為パラダイムへの転換とも言うべき主張を繰り広げる。このような見解は従来の道徳判断あるいは道徳推論偏重、そして理性的あるいは合理的な原子論的自我という道徳行為者像を前提とした議論にたいする批判としても重要である。しかし一方で、ケアリングの倫理自体にも多くの困難が付きまとうこともまた動かし難い事実である。そのようなケアリングの倫理が抱える問題のうちで顕著なものである三つを以下で示す。これらはケアリングの三つの区別、すなわち「気にかける」と「ケアをする」、

²³ この「制限と到達可能性」という理想を構成する二条件は、「反省と評価」とも言い換えられるだろう (Noddings, 2010, p.79)。

徳としてのケアリングと関係としてのケアリング、自然なケアリングと倫理的ケアリングからそれぞれ生じる問題であって、ケアリングの倫理にたいする主要な批判でもある。

（１）遠い者へのケア

第一に、ケアリングの倫理では遠い者へのケアあるいは隔たりのある者へのケアがなされない、あるいはなされ難いという批判である（Card, pp.102-104; Hoagland, pp.109-114）。これはケアリングの倫理が「ケアをする」という身近な人にたいする直接の行為こそを、最も望ましいケアとして扱っていることに起因する。遠い者にたいするケア、あるいは未来世代にたいするケアの問題については、『家庭から出発する』において「気にかける」ことの役割を強調することによって、解消が試みられているので、これについては次章で取り上げることとする。

（２）搾取関係

第二に、ケアリングの倫理が提唱された当初からなされていた、ジェンダー差による搾取関係にかかわる問題である。これは主に A. Jaggar などのフェミニストによって投げかけられた批判であるが、それは Kuhse がケアリングの倫理を看護倫理として採用することに反対する²⁴のと同様の理由から提出されている。すなわち、ケアリングを「女性的なもの」と特徴づけることで、ケアリングにかかわる仕事や役割を女性に帰する方便にされかねないという危惧である（Bubeck, p.207; Card, pp.105-107; Houston, pp.115-119）。しかし、この批判は杞憂である。Noddings の説明によれば、彼女は「女性的」という言葉を象徴的に

²⁴ Kuhse がケアの看護倫理に反対する理由はそれを職業倫理として措定することで不必要に看護師を拘束するという原則主義の倫理理論と同様の弊害が考えられるからだ。ケアリングは特定の人間関係の根底にあるものであって、特定の職業や性別に帰せられるべきものではない。それゆえ彼女は「ナースの倫理には反対だが、ケアリングには賛成」を表明したのである（Kuhse, p.142）。

使用しているのであって、現在女性がケアの性質を示す傾向が強いのも社会的な要因によると述べている²⁵。ましてや、男性がケアリングをすべきではないとか、男性にはケアの性質が欠けていると主張しているわけではない(Noddings, 1984, pp.26-27)。この説明に加えて、『家庭から出発する』においてはケアの人間観に根差した説明がなされている。それは「関係的自己」という自己は関係のなかで生成されるという人間観であるのだが、詳しくはこの概念が明示的に語られる次章において再論する。

(3) 倫理としての問題

第三に、ケアリングの倫理にかんする倫理理論としての側面にたいする疑義である。この批判は三つの問題に分かれる。

一つは、普遍性あるいは公平性をもたない「倫理」はあり得るのか、あるいは許容されうるのかという批判である。2.1節で確認したとおり、Noddingsのケアリングの倫理（ケアの倫理一般にかんしても該当することであるが）は普遍化可能性も公平性ももたない倫理理論である。Kuhseによれば「倫理の最小限の概念」は普遍性と公平性であり、これをもたない倫理は倫理として認められない。これは、公平主義をとる論者に共通する批判であるかもしれないけれども、しかし個別主義の立場をとる倫理理論は歴史的にも存在するのであって（品川, 159-160頁）、この批判はメタ倫理学レベル²⁶で公平主義と個別主義のどちらをとるのかという問題に重ね合わせられよう。

²⁵ Noddings において、「女性的」あるいは「女性」という表現を象徴として使っていると解し得ない箇所が見られることがある。たとえば、女性の経験を議論の傍証のために不用意に用いたり（Noddings, 1984, p.28）、女性が子育てを担うようになったことにたいする生物学的説明も強力であると述べたり（ibid., pp.128-129）する箇所が散見される。しかしこれは生物学的決定論への接近というよりは、ミスリーディングな表現と考えて、彼女の基本的な立場と受け止めない方が適切であると思える。というのも、Noddings は一貫してケアを男女ともになしうるものであると考えているし、「女性的」という言葉は象徴として用いることも明言しているからだ（ibid., p.2）。

²⁶ ここで言う「メタ倫理学レベル」とは、「倫理的判断に用いる概念の意味の分析」という通常用いられる意味ではなく、「倫理とは何か」という問いもメタ倫理学的分析と呼ぶとする品川の区別（品川, 149 頁）に依拠した用語法である。

二つは、ケアリングの倫理は相対主義に陥るのではないかという批判である。これは個別主義をとるがゆえに生じる問題である。つまり、ケアリングの倫理においては、それぞれの人がもつ理想同士が葛藤してしまうおそれがあるという問題である。これにたいしてNoddingsは『ケアリング』のなかで応答している。すなわち、ケアリングの理想は「ケアリング関係の維持」という普遍的要素を含んでいるため、相対主義に陥ることはないと断言する(Noddings, 1984, p.85)。そのため、理想同士の葛藤が生じないことはもちろん、複数の原則を認める倫理説とは異なり、優先順位の問題も生じないというのである。なるほど、人間関係を原理の上に据えているので、規則や原理または人間関係以外の何かとの葛藤が起こった場合は問題は生じないだろう。しかし、維持すべき関係同士が葛藤する状況においては事態の解決は容易ではない。たとえば、ある人にとってどちらもケアすべき存在である、人種差別主義者の親戚と黒人の友人とのあいだに諍いが生じたときにケアするひとがとるべき行為についてのNoddingsの解答は不十分なものと言わざるを得ない。すなわち、ケアするものとしての私は「生きてきた関係の年月を証拠とした信頼」に基づいて「脅威にさらされている」方をケアすべきであるとするのである(Noddings, 1984, pp.111-112)。

三つは、ケアリングの倫理が「倫理学(ethics)」ではなく、「倫理(ethic)」であることにかんする問題である。Noddingsは道徳を、原理にもとづく道徳判断の導出を扱う「専門的な倫理学」と、特定の人具体的な状況における倫理的行為を扱う「個人の倫理」とに区別する。そのうえで彼女が奉じるケアリングの倫理は後者に属する理論であるとし、倫理的行為を主題化していることこそ、ケアリングの倫理が倫理であることを表しているとする(ibid., pp.26-27)。すなわち、少なくとも『ケアリング』を執筆した段階のNoddingsは、ケアリングの倫理は正義の倫理という「専門的な倫理学」に先立つ²⁷前道徳的な独立した領域で

²⁷ 「専門的な倫理学に先立つ」とは、伝統的に家庭教育を担ってきたケアが正義の発達に先立つという意味で発生論的に先立つという意味だけではなく、倫理の基盤として先立つという意

あると同時に、それを包含しうるあるいは場合によっては凌駕しうる可能性をもつ倫理理論であると考えていると理解しうる。

3. 『家庭から出発する』におけるケア理論の再構成

これまで Noddings が『ケアリング』において提唱していたケアリングの倫理の理論構造を紹介してきた。しかし、この倫理理論には 2.4 節で指摘したとおり、いくつかの看過し難い問題点がある。Noddings はさまざまな批判を受けて、『家庭から出発する』において自身のケアリングの倫理を社会政策論にまで拡張する社会理論として構想している。

本章では、まず Noddings がなぜケアリングの倫理をケア理論へと展開したのかを記述する (3.1 節)。次に、『ケアリング』におけるケアリングの倫理と、『家庭から出発する』において社会理論にまで拡張されたケア理論の共通点と相違点を二つの切り口から指摘する。一つはニーズを基盤とするケア理論という観点であり (3.2 節)、二つは関係的倫理としてのケア理論という視点である (3.3 節)。

3.1 なぜケア理論を展開したのか

『ケアリング』におけるケアリングの倫理のなかに見出された三つの問題点にたいする批判を受けて、Noddings は『家庭から出発する』においてそれらの批判に一定の解答を与えるための理論展開を行なった。本節では Noddings がなぜこのような理論展開を行なったのかを記述する。その主要な理由は、2.4 節に示したケアリングの倫理の問題点、すなわち (1) 遠い者へのケア、(2) 搾取関係、(3) 倫理としての問題に対応して三つある。

(1) 遠い者をもケアしうる「気にかける」

味も含まれている。

2.4 節で引用したカンボジアの子どもを気にかけ募金するという例にたいする批判によって明らかなように、ケアリングの倫理における道德性の基礎である「ケアをする」ことだけでは、遠くの者をケアすることができない。また、直接ケアすることはなくとも誰かを気にかけることは日常的に多く見られることでもある。この遠い者にたいするケアの問題はケアの倫理一般にたいして向けられる主要な批判の一つである (Card, pp.102-105; Rachels, p.174)。では、『家庭から出発する』において Noddings はこの問題をいかに扱っているのだろうか。

Noddings は『ケアリング』において「ケアをする」ことが唯一の道德性の基礎であるとした。それにたいして『家庭から出発する』においては、上述の遠い者へのケアをめぐる問題を解決するために、ケアを公的領域にまで拡張する契機として「気にかける」ことの位置づけを変更している。「気にかける」ことは正義とケアリングをつなぐ「正義感覚の基礎」(Noddings, 2002, p.22) である一方、「ケアをする」ことを花開かせるための手段である²⁸。このように、「気にかける」ことは遠い者のケアをなすための公平性によってケアを拡大する方法を示唆するという重要な役割を帰せられるようになった。しかしやはり道德性の基礎が「ケアをする」ことであるという点に変わりはない。

それゆえ Noddings は、「気にかける」ことの意味の変更によってケアリングの範囲を拡張し、遠い者へのケアをある程度可能にしたという点で、C. Card の批判に一定の解答を与えていると言えるだろう。ただし、ケア理論が「気にかける」ことをいかに適用するのかは不明瞭なままである。というのも Noddings 自身も述べているように、「気にかける」ことはケアリングの観点からは忌避されるべき抽象性と公平性を備えた概念 (ibid., p.23) であるがゆえに、遠い者へ

²⁸ たとえば、「気にかける」ことの典型例として挙げられていたアフリカの人への募金について考えてみよう。現時点では、アフリカの人々への募金は今はまだ会ったこともないアフリカの人々を気にかけた行為にすぎないが、将来その人々のなかの誰かが私が直接ケアをする相手になる可能性もある。この意味で、「気に掛けることはケアを花開かせるための手段」でありうる。また、私の募金はもし悪用されなかったとしたら、アフリカの多くの人に公平に分配される。この意味で、「気にかける」ことは公平主義に立った「正義感覚」が養われるための基礎でもある。

のケアの実践の際に正義の倫理と同様の誤りを犯すおそれが否めないからである。

（２）相互依存的な人間観という前提

ケアリングの倫理が提起された当初からフェミニズム思想家によってなされてきた批判が、ケアリングの倫理は女性にケア役割を帰することによって搾取関係を産み出すというものである (Card, p.105)。これに対して Noddings は、「女性性」という表現はあくまでも象徴として用いているものであると弁解していた (2.4 節)。それに加えて『家庭から出発する』においては、ケア理論はそもそも人間とは自律的でなく相互依存的であるという人間観を前提しており、したがってケア理論は女性にのみケア役割を押しつけようとするものではないとする (Noddings, 2002, pp.110-112)。たとえそう見えたとしても、それは歴史的に女性がケア役割を担ってきた経緯を示しているのであって、本来は男女共にケア役割を果たすべきであると主張する。

（３）権利という語彙の獲得

ケアリングの倫理は、道德判断・道德推論を中心とする「正当化された行為の研究」(Noddings, 1984, p.94) であるところの他の倫理学説（「専門的な倫理学」）とは異なり、他者に道德的に接する方法にかんする研究であるところの「倫理」であるがゆえに、多くの誤解を受けてきた。ケアリングの倫理における倫理としての第三の問題にかんする Noddings の見解は『ケアリング』のなかに十全に示し尽くされているように思える (2.4 節)。そこでここでは、ケアリングの倫理を社会理論として拡張したことによって獲得されたケアリング理論の新しい語彙を取り扱う。すなわち、ケアリングの倫理において自然なケアリングをケアされるひとの欲求を受容したものとして記述していたのにたいして、『家庭から出発する』においては社会理論として確立するために欲求をニーズとし

て同定するというプロセスが組み込まれ、記述されるようになった。換言すれば、理論の適用範囲の拡大のために、道徳行為への動機づけあるいはケアされるひとの願望にかんして大きな役割を果たす要素として、ニーズ概念が導入されるようになったのである (Noddings, 2002, chap.3)。

3.2 ニーズを基盤とする倫理理論としてのケア理論

『ケアリング』における「ケアリングの倫理」は、上述の問題意識から『家庭から出発する』において「ケア理論」へと展開された。本節では、それらの共通点と相違点を参考にして、『家庭から出発する』におけるケア理論を、ニーズを基盤とする倫理理論として再構成する。まず、倫理的行為の源泉となるべき倫理的感情について、欲求とニーズという概念を切り口に『ケアリング』におけるそれとの比較を通じて記述する。そして、『家庭から出発する』における Noddings のニーズ論に少し立ち入り、『ケアリング』におけるケアリング理論よりも細分化されたケア理論の理論構造を検討する。さらに、社会理論として展開されたケア理論の最大の眼目である正義感覚と「気にかける」こととの関係を取り上げる。

3.2.1 ケア理論における倫理的基盤としてのニーズ

『ケアリング』におけるケアリングの倫理においては、倫理的行為の源泉となる感情は「したい」という「欲求」とされていた。この欲求にもとづく行為が自然なケアリングという最も根源的な行為とされていたのである。この自然なケアリングの際にケアするひとはケアされるひとの「必要」に応じて「したい」という欲求からケアリングをなすのである。ここでは欲求と必要はほとんど渾然一体となり区別はつかない。だからこそ、当初 Noddings のケアリングの倫理とは、自然なケアリングにもとづく倫理的行為の記述であるという極めて粗雑な解釈がなされることさえあったのだと考えられる。しかし、これは誤っ

た解釈とは言えないにしても、少なくとも浅薄な理解である。というのも、素朴な欲求、しかも個人的な欲求から倫理的な規範を導くという主張は倫理理論の構造としてあまりに単純すぎるし、もし Noddings の主張がそのようなものであるならば、「倫理的自己」や「倫理的理想」といった理論を複雑化する概念を導入する必要もないからである。

では、『家庭から出発する』においては自然なケアリングと倫理的ケアリングとの関係はどのように説明されているのだろうか。ここにおいても両者のケアリングの関係は『ケアリング』の説明と根本的には変わりはないけれども、自然なケアリングをめぐる記述が敷衍されている。

まず、前述した『ケアリング』における自然なケアリングと倫理的ケアリングについて思い起こしてみよう。ケアされるひとの困窮に接してケアするひとはケアの必要を看取し「私はしたい」という欲求をもつ。これが自然なケアリングであり、ここで必要と欲求は、「ケアリングの必要があるからケアしたいと欲求する」という関係にあるとされた。このようなケアリングを引き起こす構造のなかに「私はしなければならないのだが、私はしたくない」という葛藤が生じたときに、ケアリング関係を維持するためにケアリング関係の理想像である「倫理的理想」に導かれてなされるケアリングが、倫理的ケアリングであった。

では次に、『家庭から出発する』における両者の関係を描出しよう。その関係は『ケアリング』におけるそれに比べると多少細分化されている。ケアされるひとの困窮に接して、ケアするひとは「私はしたい」という欲求を感じる。『ケアリング』における記述と同様に、ここで「ケアの必要があるからケアしたいと欲求する」という自然なケアリングにつながる場合もある。しかし、Noddings のケア理論において最も倫理的な行為である倫理的なケアリングにおいては行為に至るまでにニーズ概念が介在しうる。すなわち、ケアするひとがケアされるひとの何らかのニーズを確認し、かつケアされるひと自身ではそのニーズを

充足し得ないので、ケアするひとがそのニーズを充足したいと欲求する。このとき「ケアするニーズ」が生じるのである。つまり、ケアをめぐる必要性の分析を経たニーズという段階が付加されているのである。

それゆえ、『家庭から出発する』における自然なケアリングと倫理的ケアリングは以下のように記述しうる。まず、自然なケアリングは、ケアされるひとの苦境に接したケアするひとがケアの必要を看取し「ケアしたい」と欲求することとでなされる行為、あるいはケアされるひとの欲求がニーズとして同定されるに至らない段階でケアするひとの「したい」という欲求にもとづき充足されるものである。そして倫理的ケアリングは、ケアされるひとのニーズに応答してケアするニーズとして同定された欲求が、ケアするひとがしたくないかどうかにかかわらず、「しなければならない」行為である。この「しなければならない」は、『ケアリング』における倫理的ケアリングよりも拡張された規範、あるいは少なくとも『ケアリング』の段階で示し得た範囲以上の語彙を獲得した規範である。というのも、『家庭から出発する』における倫理的ケアリングの規範は権利という語でも表せるようになったからである。このことにより、個々のニーズを充足するというケアが社会全体の制度のなかで確実にサポートされ促進されるような社会の仕組みが要請されるようになるのである。

3.2.2 Noddings のニーズ論

前述のように、『家庭から出発する』におけるケア理論では倫理的行為に導く理論構造が細分化されている。『ケアリング』においては「したい」という感情が自然なケアリングという最も倫理的な行為の源泉であった。一方『家庭から出発する』においてはケアされるひとのニーズを受けて「ケアしたいというニーズ (needs to care)」という特殊な感情の段階が導入されている。この相違はケアリングの倫理とケア理論との理論構造の相違として反映されているだろう

か。欲求²⁹とニーズには相違があるのだろうか。このことを以下で論ずる。

カントとは異なり、倫理的であろうとすることと幸福の追求との両者を同様に重要視する Noddings は、幸福な生活のためにはある一定のニーズの充足が不可欠であると考え、「ニーズは欲求よりさらに根源的である」として、ニーズと欲求を区別する (Noddings, 2002, p.57)。Noddings は一つの指標として、欲求を、それを欲している人以外が満たすべきニーズとして認める基準を以下のように示す。

- 1) ニーズとして認められる欲求は、相当な期間にわたってかなり安定しており、かつ／または強い。
- 2) その欲求は望ましい結果もしくは少なくとも害がない結果に明らかに結びついている。さらに欲求されているものが得られなければ、その結果を達成することは不可能か、困難である。
- 3) その欲求は、それをかなえることに身を入れている人の力（や手段）によって成就されうる。
- 4) 欲している側はその欲求の充足に役立とうとし、また貢献しうる。

(Noddings, 2003, p.61) ³⁰

このように、欲求の確かさや激しさ、価値との関係、満足の可能性、実現への意欲がニーズの判断基準とされる。そしてニーズの要求が認められると、その欲求はそれをニーズとして認めたケアするひとに応答責任を課し、それを充足するように働きかけるのである。

また、Noddings はニーズを、生物学的ニーズとその他のニーズに区別したう

²⁹ Noddings は「欲求 (want)」と「欲望 (desire)」を同義語として用いる。Noddings は、道徳的動機づけの解釈における「欲望」概念の重要性を認めながらも、欲望を日常的な意味で使っているのである。

³⁰ 欲求が表明的ニーズとして認識される基準については『家庭から出発する』においても、全く同様の記述が見られる (Noddings, 2002, p.58)。

えで³¹、後者を「表明的ニーズ (the expressed needs)」と「推測されるニーズ (the inferred needs)」に区別して、以下のように定式化する (Noddings, 2002, p.57)。すなわち、表明的ニーズとは、ケアされるひとから意識的に、あるいはその行動によって生じ、ケアされるひとによって表現されるニーズであり、はじめはケアするひとによって推測されたものであったとしても、ケアされるひとによって自発的に表わされるニーズである。そして、推測されるニーズとは、ケアするひとに由来するニーズであり、ケアされるひとの欲求や欲望から直接生じるのではなく、ケアされるひととケアするひととの二重の起源をもつが、後者の起源が支配的なものと定式化される。ただし教育学者として Noddings は、推測されたニーズをゆくゆくは表明的ニーズとするように、子どもたちに期待している。

では、このようなニーズから権利への移行がいかに説明されるかを見てみよう。Noddings は、家のなかで家族がたてる騒音に悩む A さんが、「ちょっと平和で静かに暮らす権利」を主張するという例に即して、権利の正当化の五つの条件を以下のように提示する。

- 1) ニーズを引き起こす状況、すなわち条件の集合がある。
- 2) ニーズは明晰な言葉によって伝えられる。
- 3) それを聞いた人々のうちで少なくとも誰か一人が、そのニーズの言明を正確に・共感的に解釈し、その言明にたいして「私はよくわかります」という応答を与える。
- 4) ニーズの正当性を認知したので、その集団はいまや騒音を産み出す際の自身の役割や騒音を減ずる（潜在的な）力を検討し、「私たちはそのことをなしうる」という形で応答する。
- 5) ニーズが公式に権利とみなされる。すなわち、その言明を聞く人々は

³¹ この区分は D. Braybrooke の著作 *Meeting Needs* におけるニーズの区分に依拠している。

そのニーズの正当性と、そのニーズを充たす自分の力を認識し、「私たちはこのニーズを充たさなければならない」という形で応答する。(ibid., p.54)

この事例を一般化すれば、次のようになる。まず、ニーズがそれをもつ者や集団によって表明される。次に、その正当性がニーズの充足を行いうるあるいはそれを行う関係者によって認識される。すなわち、そのニーズを充足する権利が認められるのである (ibid., p.55)。

ただし、権利がニーズから生ずるといっても、権利がニーズや関心と同一であるわけではない。一度権利が成立すると、その権利をもつ集団に属する者はニーズや関心とは無関係に権利保有者となる。また、ニーズは権利以上に過剰に増加しうるので、適切に査定することも欲求と区別することも同定することも難しい。それにもかかわらず、Noddings がニーズから権利を正当化することに固執するのは、孤立的な個人が他者の干渉を拒絶するという権利に基づく認識とは異なり、ケアを必要とする有機体としての人間という概念から始めることで、他者にたいする多様な行為を惹起させ、ケアリング関係を倫理的行為の基盤にするためである。すなわち、ケアされるニーズをもつ者という概念が権利保有者という概念と同様に尊重されるべきだ、と Noddings は考えているのである (ibid., pp.55-57)。

以上のように、自由主義において諸権利とみなされるニーズは、まさに「家庭から出発する」ニーズを同定し、それに応答するなかで生じるべきである、と Noddings は考える。しかし、ケアするひとがニーズを介さない諸権利に強く拘束されすぎて、ケアされるひとが表明していないニーズへの応答が不可能になるという危惧がある。また、ニーズから権利への移行に際しては、文化的差異や権力関係への感性、他者を助ける際に独善的に行動してしまう誘惑への抵抗などが要請されるだろう。しかし、ここでは Noddings のニーズ論にはこれ以

上立ち入らず、最後に「気に掛ける」ことという観点から、このような欲求やニーズに基づく Noddings のケア理論の再構成を試みる。

3.2.3 ケアと正義をつなぐ「気にかける」

前項で指摘したように、『家庭から出発する』において提示されているケア理論には規範性の対象範囲の拡大が見受けられる。このような権利を含めた規範性を支える社会理論の必要性に Noddings はいかに答えているだろうか。

ここで「気にかける」ことの『家庭から出発する』のなかでの役割の変化を考察しよう。Noddings は『ケアリング』においては取るに足りないものとしていた「気にかける」ことを、『家庭から出発する』においては「ケアリングと正義とのつながりを提供する」とともに、「正義感覚の基礎」である注目すべきものとして扱っていた。ケアリングを J. Rawls の正義論を具現した理論であると主張する S.Okin は Rawls の正義論が「他者への責任とケアと関心の声」(Okin, p.230) を中心に含んでいると指摘しており、一方 Rawls は政治的リベラリズムのもとでの市民は、正義感覚と善の個別的な概念という両能力を必要とすると認めているという。これらの議論を受けて Noddings は、「ケアリングは正義感覚に根差している基本的善を提供している」、と示唆する (Noddings, 2002, p.22)。

しかし、Noddings にとって「気にかける」ことは「ケアをする」ことを「花開かせる条件を設定する際の手段」であって、「気にかける」ことは「ケアすることを設定し維持し高める際に助けとなりうる」(ibid., pp.23-24) ののである。それゆえ、ケアリング関係に至らない「気にかける」ことは「空虚である」と Noddings は結論する。Noddings にとっては、「ケアをする」ことは「自然で望ましい状態」であり、「情感的なケアをすることに由来する気にかけることはケアをすることの目的を達成するのに役立たなければならない」のである (ibid., p.24)。

したがって、ケアをすることを倫理的感情の源泉とする Noddings の基本姿勢

は大きく変わっていないと言える。けれども、気にかけることがケアと正義をつなぐものとしての役割を与えられているとはいえ、個別主義と公平主義という倫理的な基盤を異にする両概念が果たして容易につながりうるかは甚だ疑問であると言わざるを得ない。また、そもそも気にかけることはケアリングの倫理に含まれるので「個人の倫理」に属するのにたいして、正義感覚は原理からの道徳判断を扱う「専門的な倫理学」に含まれる。専門的な学ではないケアリングの倫理が学として確立されている正義の領域に容易にコミットしうるのか。この問題が曖昧である限り、気にかけることの位置づけも不明瞭なままとなる。このように多くの困難を抱えつつも、ケア理論が社会理論として一步を踏み出したことは確かである。それにともなって、倫理的側面が強調されていた『ケアリング』におけるケアリング理論とは異なる自己概念を提示していることも、注目すべき変化と考えられる。以下において、このことを論ずる。

3.3 関係的倫理としてのケア理論

前節で見たように、ケアリングの倫理とケア理論では多少異なる主張がなされている。そのなかで、ケア理論の理論構造を把握するために、ケア理論における欲求とニーズを取り上げ、ケア理論をニーズを基盤とする社会理論として記述した。このような『家庭から出発する』におけるケア理論にたいする社会的側面の強調にともない、その自己概念も『ケアリング』におけるそれと比べて多少変化しているように思える。そこで本節では、まずケア理論における「関係的自己」という考え方について検討する（3.3.1）。そして、以上の議論を踏まえて、『家庭から出発する』におけるケア理論のなかで倫理的行為を導く「倫理的理想」がいかに扱われているかについて考察する（3.3.2）。

3.3.1 関係的自己

『ケアリング』のなかで描出されている自己概念は、2.3 節において指摘した

ように、倫理的自己である。この倫理的自己への焦点化は、その倫理的側面の強調を企図してなされたと考えられる。それにたいして、『家庭から出発する』においてその記述に多くの紙幅を割かれていると同時に、理論のなかでも大きな役割を果たすようになったのが「関係的自己」である。「関係的自己」は『ケアリング』においてはその存在が示唆される程度にとどまっていたが、『家庭から出発する』においてはいかに説明されているのだろうか。

『家庭から出発する』において Noddings は自己を、その場その場の状況において変わりうる不整合なものと見なし、その意味で確固たる「真の自己は存在しない」と指摘する (Noddings, 2002, p.107)。そのうえで、自己とはケアするひととケアされるひととのあいだの相互関係においてのみ生起するとし、この関係的自己を以下の二つの側面に分ける。すなわち、『ケアリング』においても重要な役割を果たしていると同時に、自己の倫理的な側面を司る倫理的自己と、私たちがいつもなしている習慣に従う場面で生起する「習慣的自己 (habitual self)」である。後者は朝隣人に会ったら挨拶をするといった「自己のもつさまざまな出会いの集合のうちで、日ごろの文化の産物であるような部分集合」である (ibid., p.103)。このように、習慣的自己は社会規範にゆるやかに縛られることで成立しているけれども、その拘束力は絶対的なものではない。というのも Noddings によれば、人が何かを行うときにはハプニングがつきものであり、私たちはその偶然の出来事にたいして「創造的な間に合わせ」によって対処し、やり過ぎさなければならぬからである。それゆえ、ケアするひととケアされるひとは予期せざる出来事が起こるなかで、お互いに影響し合いアイデアをしぼりだすことで何とかケアリング関係を維持しながら、それぞれの自己を涵養していくのである。

このように、『ケアリング』においては「倫理的自己」がケアリングの倫理における中心的な自己概念として語られていたのにたいして、『家庭から出発する』においては「関係的自己」という人間観を重視するようになった (ibid.,

pp.97-103)。もちろん、両概念は両著作どちらにおいても登場する。ただし、『ケアリング』においては、倫理的行為にかかわる自己概念としての倫理的自己が焦点化されていた。一方、『家庭から出発する』においては、日常の些細な行為に根差す「関係的自己」が理論の中核をなす自己概念として強調されている。この関係的自己は倫理的自己を内含する概念であるけれども、倫理的な場面にとどまらない社会における自己のあり方を表現しており、そのためケアの社会政策論を構想するケア理論にとっては不可欠な要素なのである。

3.3.2 ケア理論における「倫理的理想」

ケア理論においても『ケアリング』におけるケアリングの倫理と同様に、倫理的行為を導くものは「倫理的理想」である。これは、ケアしケアされた関係の理想像、すなわちケアリング関係が成立したときのイメージのことであり、この認識にかんしては両著作において本質的な見解の違いは見いだせない。しかし、前項で指摘した理論の中核をなす自己概念の変化と「場所」にかんする考察の付加にともなって、理想にかかわる議論にかんして以下の二つの論点を指摘しうる。

まず第一に、「関係的自己」という概念への焦点化にともなう理想像の明確化である。上述のように、倫理的理想とはケアするひととケアされるひととのあいだでなされた過去のケアリング行為や経験に基づいて描出されたケアリング関係のイメージのことである。『ケアリング』における倫理的理想は「ケアするものとしての私」という倫理的自己のイメージとして考えられていた。一方、ケア理論では倫理的理想の「倫理的」側面は倫理的自己が担っているけれども、他の側面（たとえば社会的・政治的・文化的側面）では関係的自己のイメージが理想概念を形成していると解しうるだろう。というのも、理想の内実がケアリング関係であることに変わりはないのであり、社会政策論としてのケア理論の確立を目指して書かれた『家庭から出発する』は倫理的側面と社会的側面を

同様に重視していると思えるからである。それゆえケア理論においては、倫理的側面を包含する倫理的自己と同時に、それをも包括する関係的自己がケアリングという倫理的行為を導く「理想」のイメージを形成し支えていると言える。

次に、『家庭から出発する』における「場所」概念への注目にもなう理想概念の具体化である。『ケアリング』において提示されていた倫理的行為を導くものとしての「倫理的理想」は「ケアしケアされる関係の理想像」というある意味では「抽象的な」表現で示されていた。理想の具体性は、その性質である現実における到達可能性と過去の記憶による理想像の制限が保証しているのみであった。一方、『家庭から出発する』においては「理想の家庭 (an ideal home)」という具体的な場所における像が示されている。この理想的な家庭とは「注意深い愛 (attentive love)」が実現されている場である (Noddings, 2002, pp.177-181)。このようにして、『ケアリング』において到達可能な理想として提示されていた倫理的理想は、具体的な現実の場所を与えられたのである³²。

このように、倫理的理想とは倫理的ケアリングという倫理的行為を導くものであるという認識には変わりはない。倫理的ケアリングは自然なケアリングが生じない場合に要請され、「ケアするひととしての自分自身についての理想を保持するために、自分自身による抵抗を克服」することとなされる行為である (ibid., pp.29-30)。ケア理論において重要な論点は「個人の倫理的理想にかんする継続的な吟味と成長」である。倫理的理想は「私たちの判断を安定したものとし、私たちが気まぐれな行動をしないように手助けしてくれる」ものであって、「他者の要求が、私たちが行う応答の第一の材料」として倫理的理想を涵養するのである (ibid., pp.30-31)。このように、理想の役割に変化はないけれども、「理想の家庭」という一定の具体的な場所をもつモデルが提示されていることが『家庭から出発する』における特徴と言えよう。

³² 当然のことながら、「理想的な家庭」の表記が an ideal home であることからわかるように、ここでの理想はそれぞれの人にとって個々さまざまな理想であることに変わりはない。

4. 結論

本稿では、『ケアリング』と『家庭から出発する』という Noddings の二つの著作の対比を通じて、ケアリングの倫理あるいはケア理論の倫理的規準の内実を明らかにしようとしてきた。端的に言って、両著作において全体的な主張は変わっていない。それゆえ 2 章において検討したように、ケア理論の倫理的規準は次のように記述できる。すなわち、最も適切なケアリングとは①対面関係においてなされる、②ケアするひととケアされるひとが双方向的に関係し合っ
てなされる、③心のこもった「ケアをする」ことである。

では、両著作の相違点は何か。それは『家庭から出発する』において修正が試みられた点から明らかであろう。そこではニーズ概念を導入することで権利概念に到達する道が開かれ、「気にかける」ことの位置づけの変化によって遠い者をもケアの射程に含めることが企図されていた。したがってケアリングの倫理を社会理論にまで拡張したものが「ケア理論」であると言える。

このように、ケア理論においてケアの倫理的規準にかんする説明がニーズ概念の導入によって詳細になっているとはいえ、Noddings のケア理論の根本的な主張は変わっておらず、他の倫理理論と対比しうるような明確化がなされたとは言えない。そこで最後に、ケア理論の倫理としての問題のうち重要であると思われる三点を指摘したうえで、倫理理論としてのケア理論の展望を考察したい。

第一に、倫理的行為の導出は自然なケアリングに依拠しているという点である。ケア理論は「したいからする」というある人には直感的に理解されやすいかもしれないけれども、他の人には共有し難いかもしれない欲求という極めて弱い基盤に立って議論を進めている。この考え方を真っ向から受け入れるならば、この感覚を共有できない人はどのように扱われるのか。自然なケアリングをなし得ない人は非倫理的でしかあり得ないのか、あるいは少なくとも本当に

倫理的には行為し得ないのか。『ケアリング』の段階での Noddings の立場からはそのような人は倫理的ではあり得ないと言わざるを得ないだろう。しかし『家庭から出発する』における「気にかける」ことの位置づけの変化はこのような状況を多少とも打開することに貢献したと考えられるのではないだろうか。というのも、Noddings の記述に従えば、正義感覚から出発して「気にかける」ことを経て「ケアをする」ことに到達しうるようになったからである。このように、ケア理論では正義のアプローチからケアに至ることも、その逆も可能になったとされたのである。

第二に、ケア理論は倫理理論なのかという問題である。ケア理論はその基盤にかんして正当化を不要なものと断ずるが、このような倫理理論は許容されうるだろうか。また、ケア理論は倫理的行為を導くものとして原理ではなく理想というある意味では曖昧な概念を導入しているけれども、そのような捉えどころのないものによって倫理的行為の生起を記述しうるのだろうか。この批判は大きな問題にはならないだろう。というのも、Noddings は当初から従来の倫理学の枠組みとは異なる倫理理論としてケア理論を構想していたからである。また、理想とは決まりきった型をもつものではなく、私がもつケアリング関係のイメージのなかで相手に語り掛け関係を変容させるような柔軟なものである。このことも、仮想状況を設定し、幾何学の問題を解くような方法で倫理的な問題を扱うことをよしとせず、原則主義に抗したケアの倫理の当初の主張を継承したものと考えられる。

第三に、ケア理論は他の倫理理論との違いがはっきりせず、他の倫理学説との関係が不明確であるという問題である。ここでは特に徳倫理学との関係に焦点をしばって考える。徳倫理学とケア倫理に共通点が多いということはよく指摘されることであり、Noddings 自身も徳倫理学と自身のケア理論との親和性を認識している。原則主義への批判、道徳推論・道徳判断偏重の倫理理論への疑義、行為者が置かれている具体的状況の重視など、両者は重要な点で一致が見

られる。Noddings が指摘する徳倫理学との相違点は徳よりも関係が最も重視されるべきであるという点と、行為者を偶然によって不合理な行為もなす存在と捉え「大きな物語」のなかに位置づけないという点、また、人間を役割をもつ存在ではなく個別的な関係のなかで生成されると考える点である。しかしこの相違点は徳倫理学者のなかでも特に A. MacIntyre と C. Taylor の議論との比較から指摘されたものである。けれども、徳倫理学の主張も論者によって多様であり、Noddings の議論の独自性がどこまで主張されうるかは甚だ疑問である。

したがって、このような倫理理論としての課題を抱えるケアの倫理は当初の主張通り、他の倫理学理論とは異なる枠組みに基づいた「個人の倫理」であることを保持したうえで、正義感覚に至るための道を整備するか、あるいは「学」として他の倫理学説と伍していく道をとるかを選択すべきである。前者の道をとる場合、「個人の倫理」であるというケアの倫理の独自性は保持される一方で、従来の倫理学説が作り上げてきた認識枠組みや説明の仕方との違いが強調されなければならない。それにたいして後者を選ぶ場合、他の倫理学説の道具立てを借りることで正義感覚にコミットしやすくなるかもしれない一方、学的位置づけが曖昧であるケアの倫理は、徳倫理学の一部あるいは Kuhse の主張に従えば功利主義の一部とされるかもしれない。もちろん、ケアの倫理が他の倫理学説に吸収されてはならない、とは必ずしも言えない。だが、それによってケア理論の魅力が損なわれてはならないのである。

参考文献

- Blum, L. A. (1988) . 'Gilligan and Kohlberg : Implications for moral theory', *Ethics*, vol.98, no.3.
- Braybrooke, D. (1987) . *Meeting Needs*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Bubeck, D. E. (1995) . *Care, Gender, and Justice*, Oxford: Clarendon Press.

- Card, C. (1990) . 'Caring and Evil', *Hypatia*, 5 (Spring 1990) , pp.101-108.
- Gilligan, C. (1982) . *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge: Harvard University Press.
- Halwani, R. (2003) . *Virtuous Liaisons: Care, Love, Sex, and Virtue Ethics*, Chicago: Carus Publishing Company.
- Hoagland, S. L. (1990) . 'Some concerns about Nel Noddings' *Caring*', *Hypatia*, 5 (Spring 1990) , pp.109-114.
- Houston, B. (1990) . 'Caring and Exploitation', *Hypatia*, 5 (Spring 1990) , pp.115-119.
- Hult, Jr., R. E. (1979) . 'On Pedagogical Caring', *Educational Theory*, Vol.29, No.3, pp.237-243. (1998, 斎藤勉他訳, 「教育学的ケアリングについて」, 『教育哲学・道德教育研究』, No. II, 新潟大学教育学部教育学・道德教育研究室.)
- Jaggar, A. (1983) . *Feminist Politics and Human Nature*, Totowa, NJ: Rowman & Allanheld.
- Kohlberg, L. (1984) . *Essays on Moral Development, II, The Psychology of Moral Development*, New York: Harper&Row Publishers.
- Kuhse, H. (1997) . *Caring: Nurses, Women, and Ethics*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Mayeroff, M. (1971) . *On Caring*, New York: Harper&Row Publishers. (1993, 田村真・向野宣之訳, 『ケアの本質——生きることの意味』, ゆみる出版.)
- Noddings, N. (1984) . *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, Berkley: University of California Press.
- (1990) . 'A response' *Hypatia*, 5 (Spring 1990) , pp. 120-126.
- (1992a) . *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to*

- Education*, New York: Teachers College Press. (2007, 佐藤学監訳, 『学校におけるケアの挑戦——もう一つの教育を求めて』, ゆみる出版.)
- (1992b) . ‘In defense of caring’, *The Journal of Clinical Ethics*, 3 (Spring 1992) , pp.15-18.
- (2002) . *Starting at Home: Caring and Social Policy*, Berkley: University of California Press.
- (2003) . *Happiness and Education*, Berkley: Cambridge University Press.
- (2010) . *The Maternal Factor: Two Paths to Morality*, Berkley: University of California Press.
- Okin, S. M. (1989) . ‘Reason and Feelings in Thinking about Justice’, *Ethics* 99, no. 2, pp.229-249.
- Rachels, J. (1999) . *The Elements of Moral Philosophy*, Boston: MacGraw-Hill College Press.
- サルトル, J. P. (1957) . 「情緒論粗描」, 竹内芳郎訳『サルトル全集・文集』 (297-329 頁) , 人文書院.
- 品川哲彦 (2007) . 『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理』, ナカニシヤ出版.
- Stocker, M. (1976) . ‘The schizophrenia of modern ethical theories’. *Journal of Philosophy*, 73, pp.453-66.
- Veatch, R. M. (2000) . *The Basics of Bioethics*, Upper Saddle River: Prentice Hall.

付記：本稿は、平成 24 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（やすい あやこ 京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程

／日本学術振興会特別研究員）